



長城を行く 第九回

塩池



河北、山西、陝西の三省をたどってきた長城を行く旅は、いよいよイスラム教地域の寧夏回族自治区に入った。長城はオルドスの淵にそって南に向かう。黄河は北流し、両者は銀川郊外で交差する。

早朝、榆林の南門長距離バスセンターから銀川行きのバスに乗る。今日は塩池までの約300キロを走破するのだ。まもなく、右手車窓には濃紺の空に似合う褐色の大地、オルドス砂漠が展開する。バスは砂漠の東辺に沿ってどんどん南下し、途中、靖辺、定辺の街を一気に通過した。砂礫の荒野を龍のように這う構造物が見えたり、隠れたり、長城の遺構にちがいない。定辺から塩池にいたる区間には右手に外長城が、左手には内長城が並行している。外長城は前線にあつたから壁が

高く堅牢で、後方を防衛した内長城は壁が低く小さい。韃靼の騎馬軍団が西安府への突入を狙ったアキレスの踵を、親子の双龍が守ってきたのだ。高速道路は思ったより速く、バスは榆林から塩池の料金所までを3時間半で走りきった。省道や県道なら、かるく1日はかかる行程だ。

すでに陝西省をすぎ、寧夏回族自治区に入っている。塩池は靖辺、定辺とともに長城の南限をなす。照りつける真夏の太陽の下で、数週間前に歩いた長城の北限、独石口の寒々しい風景を

思い出した。高速道路の料金所で降りてもらい、付近の集落にむかう。そこまで行く間の農地に背の低い小さな長城が這っている。内長城であろう。緑地のなかに大きな広告看板が立ち、二人の国家指導者が「以工代賑、造福人民」（救済金の代わりに仕事を、人民に幸福を）と語りかけている。

レンガで覆われた、威風堂々とした万里の長城は張家口の大境門まで、それより西は肌がむき出しの土長城であることが多い。塩池の土長城で壁高、壁幅、壁の内部構造などを調べてから、付近の小さな街まで歩く。新しい安普請の建物ばかりで、集落が持つべき温もりを感じられない。工場のように巨大な建物があるので、その関連施設からなる人工的な街なのかもしれない。そうだとすれば、あの大きな広告看板にペイントされていたスローガンの意味が理解できるのだ。小さな食堂に入つて牛肉ラー油麵で腹を満たし、タクシーをさがして外長城に向かう。

外長城と内長城は10キロほどの間隔を保って並走している。双龍の間には、数キロおきに古代の通信警報装置——烽火台が屹立する。烽火台は烽燧台とも称され、「烽」は夜間に焚

く炎、「燧」は白昼にあげる狼煙のことをさす。狼煙は乾燥した狼の糞に火を放つてあげる。油分が多く含まれているので、燃やすと盛大に黒煙を噴出した。狼の糞を燃やして上げた煙だから、古人は「狼煙」と書いたのだ。塩池にはその名前が示すように、塩の結晶を露出させた湖がある。名前を北大池という。超乾燥地帯の大地で水分が蒸発し、塩の結晶が吹き出してきた塩湖であろう。そこはもう内蒙古の領内である。烽火台のあたりから遠望すると、塩がオルドス砂漠の直射日光を反射して白く光っている。運転手に採塩場へ向かうよう頼んだのだが、遠いとか、道がない、などと渋って行つてくれなかった。越境したくないのだろうか。外国人にはわからない複雑な事情があるのだろうか。

高速道路にもどり、手をあげて銀川行きのバスを停める。車窓にはまだ双龍が並走している。前方に黄河が立ちはだかり、長城はここで大河を越える。橋を渡ると街並みが現れ、バスが銀川の市街に入ったことを知る。

中村達雄（なかもら たつお）◆ラジオペキン、オリンピックバス、博報堂などに勤務し、中国に16年間駐在する。現在、明治大学非常勤講師。



▲北大池
烽火台から塩湖の北大池を遠望する。採塩場で、砂漠の民に恵みを与える塩が白く輝いている。



▶塩池市街
工場を核とした街並みが忽然と現れた。中央政府が救済金を下付するかわりに工場を誘致し、雇用を創出している。